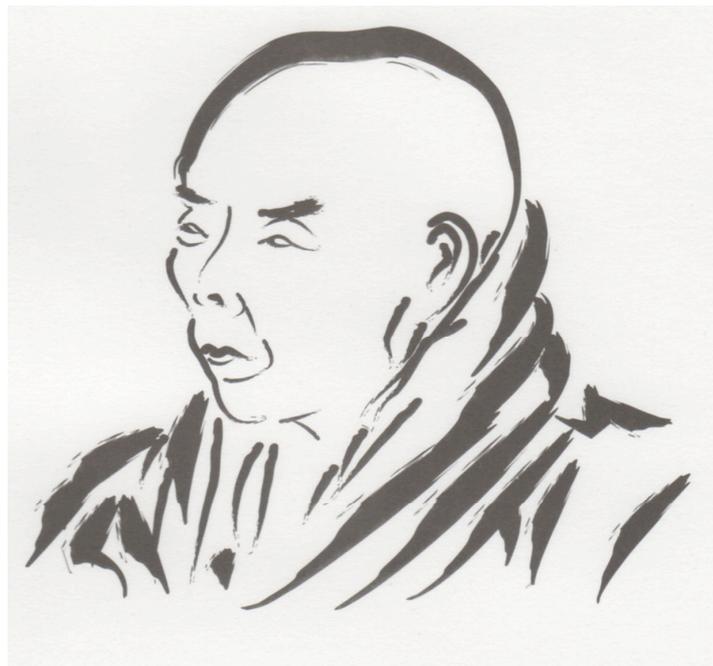


**親鸞聖人750回御遠忌**  
**第30組プレ大会**

**- 講演と舞楽のつどい -**



2010年5月23日（日）テレピアホール

主催／真宗大谷派名古屋教区第30組

# プログラム

13：00	開会 真宗宗歌斉唱 あいさつ
13：10	勤行（正信偈同朋奉讃）
13：30	記念講演
15：00	休憩
15：10	舞楽「陵王」
15：50	諸案内 恩徳讃斉唱
16：00	閉会

## ごあいさつ

第30組組長 川合幸宏

この度、私共の「親鸞聖人750回御遠忌プレ大会」に御参加いただきまして御礼申し上げます。

来たる2011年3月より勤修される本山御遠忌法要に先がけて、名古屋教区第30組では当「御遠忌プレ大会」を企画いたしました。

リーマンショック・雇用不安から端を発した世界中を取り巻く不況の波が、人々の生活に影を落としています。先行きの見えない閉塞感是人々の心に言い知れぬ不安となり、社会全体を覆っています。

「今、いのちがあなたを生きている」という御遠忌テーマのもと、私たち真宗門徒は、親鸞聖人の教えに自らの歩みを確かめるべく、当名古屋教区の運動方針として「不安に立つ」を導き出しました。

人と人は出会って、本当の自分の姿を発見出来ます。互いに相手によって私と言う個があぶり出されて、「あっ、こんな面も自分にあったのか」と喜んだり、がく然としたりします。

宗祖としての親鸞聖人に出会う場所として、色々な機会に、各寺に足を運んでいただき、教えに触れる御縁を結んでいただくことにより、又新しい自分を発見出来るこの積み重ねこそが御遠忌を円成することであろうと思います。

# 宗祖親鸞聖人の御生涯

親鸞聖人（以下聖人）は、750年前の1262（弘長2）年11月28日、90才にて御往生されました。

御誕生は、1173（承安3）年、平安時代末期に当ります。日野家末流の子として生まれ、9才の春、後の天台座主となる慈円和尚の門下として得度され、範宴の名を賜ります。それから20年間、天台宗の僧侶として、比叡山で修行・修学に励まれました。

その頃、東山吉水の地に念仏の教えを広めておられた法然上人の許へ都の人々が集まっていました。長年の修行にもかかわらず、生死解脱の境地を得られない思いで、上人の教えに尋ねた範宴は、遂に29才の時、山を下りて法然門下に入り、綽空という名を賜ることとなりました。その4年後には早々と「選択集」の書写を許され、喜びを記録しておられます。

ところが、伝統寺院から専修念仏への批判が高まり、興福寺の訴えが上奏されて、果して1207（承元元）年、念仏停止の院宣が下されました。法然上人並びに門下11名の処分が命じられたのです。その一人として、聖人は藤井善信という俗名を与えられて越後へ配流となりました。

「しかれば僧に非ず俗に非ず。禿の字を以て姓とす」と自ら宣言して4年、赦免となったのですが、翌年、法然上人は御往生。その事を知らされた聖人は、関東に留まる決意をし、常陸稲田に隠居されました。そして自ら「愚禿釈親鸞」と名告られたのです。そこで著された「教行信証」草稿が坂東本として今日東本願寺にあります。また同時に、その教えを尋ねる人々も増え、各地に門徒集団が生まれました。

しかし、念仏禁止の嵐は止むことを知らず、鎌倉にまで及ぶこととなりました。聖人は、20年間の草庵を離れ、帰洛の途につかれることとなりました。60才の旅立ちでした。多くの人々との惜別、あるいは道中での様々な交流は流罪に赴いた時と全く違っていました。「教行信証」を携えての宗祖の入洛でした。ただし「御伝鈔」には、帰洛

待の文字はなく、住居を転々とされたことが記されていますので、御苦勞の程が感じられます。その中で、和讃の御制作を始め、後世に残される多くの著述が執筆され、関東の御同行との盛んな交流が行われていました。歎異抄や書簡集にもその様子が偲ばれます。

以来、750年、「親鸞」は色々な人々から思いを寄せられ、描写され、尊ばれているのです。妻恵信尼公の手紙（「恵信尼文書」）には「青年親鸞」の姿が綴られていますので一度お読み下さい。



\*「教行信証」「御伝鈔」「恵信尼文書」はいずれも『真宗聖典』（東本願寺）に収録されています。

# 記念講演

## 「後生の一大事」

— 映画「おくりびと」と「納棺夫日記」のかはりめ —

あおきしんもん  
講師（青木新門氏）

1937年富山県生まれ

早稲田大学中退後、富山市で飲食店を経営する傍ら文学を志す。

1973年冠婚葬祭会社（現オークス）に入社。専務取締役を経て現在は顧問。

1993年葬式の現場の体験を記した「納棺夫日記」がベストセラーとなり全国的に注目され、2008年に「納棺夫日記」を原案とした映画「おくりびと」がアカデミー賞を受賞して再び注目される。

著書に「納棺夫日記」、小説「柿の炎」、詩集「雪道」、童話「つららの坊や」、チベット旅行記「転生回廊」など。

## 講演テーマについて

映画「おくりびと」が評判になるにつれ、「なぜ原作者の名が記されていないのか」とよく聞かれました。私はその度にあいまいな返事をしてやり過ごしていましたが、最初のシナリオの段階で『納棺夫日記』と「おくりびと」の間に〈かはりめ〉があることに気付いたのでした。映画「おくりびと」は、今日の既存宗教やその葬送のあり方には拒否反応を示しながらも、愛別離苦の悲しみを如何にして癒すかという構図になっていました。人は宗教を見失った時、癒しを求めるものです。そんな現代人の心情に見事にフィットしたのが「千の風」であり「おくりびと」でした。

私は親鸞聖人のみ教えに導かれて『納棺夫日記』を著したのであって、宗教を完全に削除されたのでは承服するわけにはいかなかったのです。蓮如上人の御文「白骨の章」に「後生の一大事」というお言葉があります。

今日のほとんどの人は今生を一大事とっていて後生を一大事などと思っていません。

私の本のテーマでもある「後生の一大事」を削除されたのでは著作権を放棄してでも原作者であることを辞退するしかなかったのです。そんな話を、納棺の現場体験などを交えてお話させて頂ければと思っています。

（青木新門）

# 舞楽 Bugaku

本日は、宗祖親鸞聖人 750 回御遠忌プレ大会「講演と舞楽のつどい」に、ようこそお参りくださいました。1400 年の悠久の歴史とともに生き、人間を矜哀し続けてきた雅楽に身を浸し、浄土を憶念していただければ幸いに存じます。

## 雅楽（ががく）とは

「雅楽」とは、元来は「俗楽（ぞくがく）」に対する言葉で、正統の音楽を意味します。正統な雅楽は中国・朝鮮にもありましたが、その音楽そのものは日本の雅楽とは全く別のものです。

日本の「雅楽」は、日本古来の歌と舞、古代のアジア大陸から伝来した器楽と舞が日本化したもの、およびその影響を受けて新しくできた歌の総体で、ほぼ 10 世紀（平安時代中期）に今日の形に完成した日本最古の古典音楽です。

## 大陸系の楽舞 —唐楽（とうがく）と高麗楽（こまがく）—

宗祖親鸞聖人が「和国の教主（日本のお釈迦様）」と敬われた聖徳太子によって、アジア大陸に遣隋使・遣唐使が派遣されました。国家予算の 3 分の 1 を使うほどの力の入れようでした。その使者によって 5 世紀頃から 9 世紀初めまで約 400 年間にわたり、中国・朝鮮などから輸入された音楽舞踊をもとに平安時代に完成した器楽と舞です。

大和時代から奈良時代までは種々の外来楽舞はそれぞれ渡来した時の形で演奏されていましたが、平安時代には次第に整理統合され、日本化されてゆきました。すなわち、まず、その伝来の系統により「左方（さほう）」と「右方（うほう）」に分けてその楽器編成が区別されました。左方は中国・中央アジア・インド方面に起源を有する楽舞に基づくもので、これを唐楽と呼び、右方は主として朝鮮・満州方面に起源を有する楽舞に基づくもので、これを高麗楽と呼びます。

また、演奏の形態により「管絃（かんげん）」と「舞楽（ぶがく）」に分けてその演奏技法が区別されました。さらに、多種の外来楽器は取捨選択され、楽団編成は小規模な室内楽形式に変わりました。このような外来楽舞の一大変革と同時に、日本人による作曲・編曲・作舞も盛んに行われ、ここに極めて繊細、優美な日本独自の雅楽が完成したのです。

## 雅楽の演奏形態

雅楽には、「管絃」、「舞楽」および「歌謡」の三つの演奏形態があります。

管絃は大陸系の雅楽器で奏する器楽合奏です。いわゆる「三管両絃三鼓（さんかんりょうげんさんこ）」の楽器編成で演奏します。「三管」とは鳳笙（ほうしょう）・篳篥（ひちりき）・龍笛（りゅうてき）の三種の管楽器を、「両絃」とは琵琶（びわ）・箏（そう）の二種の絃楽器を、「三鼓」と

は鞆鼓(かつこ)・太鼓(たいこ)・鉦鼓(しょうこ)の三種の打楽器を言います。

管絃では、管楽器が主な役目をします。すなわち、箏が主旋律を奏し、龍笛が同じ旋律をやや装飾的に奏します。これに、鳳笙が和音を付けます。打楽器はもちろんリズムを受け持ちますが、絃楽器も主としてリズム楽器として用います。

また舞楽は、音楽とともに奏する舞で、歌に伴って舞う「国風舞(くにぶりのまい)」と、唐楽の伴奏で舞う「左舞(さのまい・赤い装束を着用)」および主として高麗楽の伴奏で舞う「右舞(うのまい・緑の装束を着用)」とがあります。

奏法は、舞楽の場合には活発に力強く奏するのに対して、管絃の場合は緩やかに奏します。本日の演目「平調五常樂急(ごしょうらくのきゅう)」 「左方舞楽陵王(りょうおう)」二曲の奏法の違いをお味わい下さい。

### 真宗法要における雅楽

『聖徳太子伝暦』のなかに、「三宝を供養するに諸の蕃楽(ばんがく)を用う」とあり、仏法僧の三宝供養のため、雅楽でもって浄土を荘厳するよう聖徳太子が述べておられます。また、真宗が雅楽と関係するのは室町時代に入って本願寺十代證如上人の頃であったといえます。天王寺の楽人を招いて本願寺で雅楽を奏したと證如上人の「天文日記(天文6年)」に記録してあります。

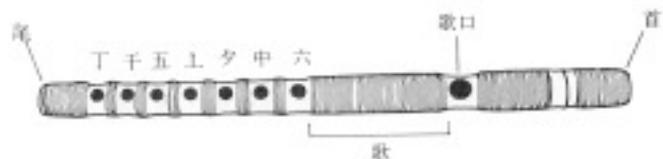
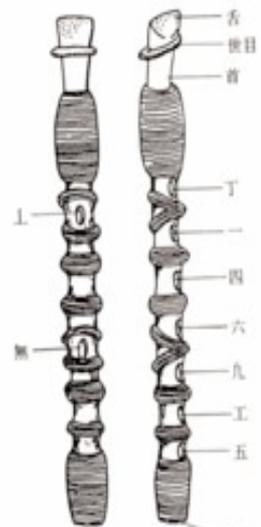
現在真宗本廟では、春の法要・報恩講法要・御遠忌法要・慶讃法要・葬儀式等の大法要に奏され本日の楽人10名も楽僧資格を有しており、3年に一度、名古屋が奏楽にご本山まで赴きます。

#### 【箏】 Hichiriki

表面に七孔、裏面に二孔がある管に、蘆で作った簧(リード)をつけて吹きます。オーボエの音色を鋭く強くしたような音と大きな音量が特徴です。音域は狭いですが、吹き方を加減することによって、同じ指遣いでも一音以上の幅で音高を変えることができます。雅楽では合奏の主旋律を奏することが多い楽器です。

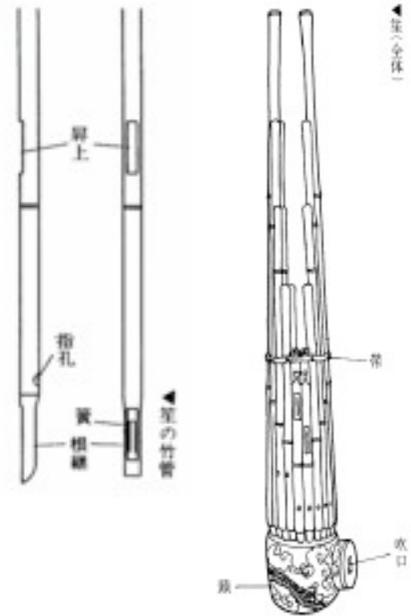
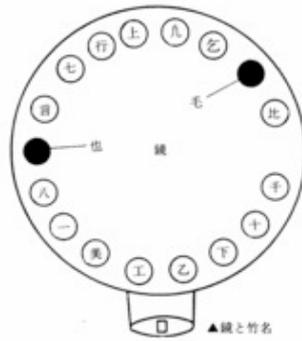
#### 【龍笛】 Ryuteki

唐楽に用いる横笛で、音色が龍の鳴き声に似ているといわれています。跳躍音や細かい装飾を伴った旋律を奏するのに適しています。



## 【鳳笙】 Houshou

吹口が付いた頭に十七本の竹管を立て、銀製の帯で束ねています。竹管のうち五本には響銅という合金で作った簧をつけ、竹管の下にある小孔を押さえることにより、吹いても吸っても音が出ます。雅楽では主として和音を奏するのに使われ、龍笛や箏の旋律にいろどりを与えます。



## 陵王 (Ryouou 左方走舞)

人を驚かす面に優しさを隠し、戦いの場に・・・

実在の中国の王の故事に基づいた舞曲。舞は「陵王」、唐楽の壺越調の曲は「蘭陵王」と呼ばれます。北齊(550年頃)の知勇武力に優れた蘭陵の王長恭は、美しい顔面であったといわれます。戦場で軍を指揮し、味方の士気を鼓舞するため、上部に龍の彫刻をのせた龍の顔か、はたまた金翅鳥(きんしちょう)を表していると思われる金色の面で覆い武勇を發揮しました。恐ろしさを増すため、動きにつれ吊りあごが揺れる構造にできています。

その戦いの後、勝利を寿いで舞ったとされる舞で、毛縁襷装束(けべりりょうとうしょうぞく)に身を包み、桴(ばち)を振り上げて舞う勇壮な一人の走舞(はしりまい)です。

林邑(りんゆう)僧侶哲らが伝えたとも、尾張浜主(はまぬし)が平安初期に唐から伝えたともされている舞で、賀の祝などで、よく舞われました。

また、この舞は童舞(わらべまい)としても舞われ、『源氏物語』の「若菜下」では玉鬘(たまかづら)の子息が舞ったと伝えられています。また王の墓は湖北省邯鄲(かんたん)の南、磁県劉莊(りゅうそう)村にあります。



団体参拝ちらし

教区お待ち受け大会ちらし

## 第30組の紹介

「第30組」とは名古屋市の昭和区・天白区、そして日進市にある真宗大谷派に所属するお寺のグループで、30ヶ寺の寺院で構成されています。

真宗大谷派とは親鸞聖人を宗祖と仰ぐ浄土真宗の一派で、京都の東本願寺を本山とする教団です。真宗大谷派は全国に約9000ヶ寺を傘下に抱えているため、全国を「教区」という名称で30地域に区分し、さらに各教区を「組」（そ）という名称で小さく区分しています。

我々が構成している第30組とは、教区分では「名古屋教区」に所属し、組区分では名古屋教区内の32ヶ組中の第30番目の組ということです。従って正式名称は「真宗大谷派名古屋教区第30組」となります。

第30組では門信徒・一般を対象とした活動として、讃頌会や門徒会による講習会や研修旅行などの活動をはじめ、組内の仲間が集い同朋総会を開催するなど、所属寺の枠を超えた幅広い活動を展開しています。

住職や僧侶・寺院関係者を対象とした活動としては、専門性の高い研修会を年に数回開催すると共に、自身による研究活動を行うなど研鑽を重ねています。また、老人福祉施設への教化活動やホームページを開設して情報発信活動を行うなど、外部に対する活動も積極的に行っています。

## 第30組HPの紹介

2006年1月に開設し、4年が経過しました。組という単位でホームページを運営することは全国的に見ても稀ではないかと思えます。

さて、ホームページを立ち上げたきっかけはといいますと、私たち僧侶は、ご門徒の方々とは接する機会がありますが、広く一般に、寺の活動等知って頂く機会がありませんでした。そこで、まず手始めにインターネットを使ったホームページを作り、ご門徒の方々を含めより多くの方々に寺に興味を持って頂けたらと思い立ち上げました。

ホームページには、組内の行事案内や寺院紹介はもちろんのこと、僧侶によるリレー法話や、行事に参加して頂いた参加者の感想など、様々なコーナーがあります。中でも一番人気なのは、「お経を聞く」のコーナーで、正信偈等を音声で聞くことができます。

また、最近では、携帯電話からも見やすいように専用のページ（一部のページのみ）も作りました。

素人のものが、手作りで運営しています。これからも益々内容を充実して、皆さんに喜んで頂けるホームページにしていきたいと思っています。ぜひ、一度ご覧頂き、様々なご意見、ご要望を頂けたら嬉しく思います。

URL: <http://www.nagoya30.net>

# 第30組構成寺院

(昭和区)

法照寺、法光寺、昭和寺、恵林寺、大圓寺、理相寺、光圓寺、願正寺、稱名寺、順覚寺、正覚寺、正福寺、永西寺、西福寺、明岸寺、願成寺、法雲寺、晃照寺、上宮寺、安順寺、常念寺、浄恩寺、引接寺、正信寺

(天白区)

泉稱寺、一心寺、教心寺、聖徳寺

(日進市)

眺景寺、碩善寺

## 讃頌会入会のお勧め

讃頌会(さんじゅかい)とは、聞法の一助として4年前に発足した会でございます。お念仏の信を戴き、今、生きさせて戴く喜びを全ての方々にお伝えすべく活動しております。

今までに研修会として高名な講師の方々と、池田勇諦先生を始めとし、平野浩司先生、加藤智見先生、そして今、第30組の推進員養成講座の講師をしていただいた四衢亮先生に「親鸞聖人の生涯に学ぶ」と題して学ばせていただいております。

今後は本廟奉仕に参加するとか、門徒会の方々と共に仏縁の地を訪ねる等、真宗の教法を聞き開き、念仏の信心を生活するにおいて実践するために、交流を深め語り合いたく思います。会費は行事の都度御支払いいただき、研修会等は参加費として1,000円をお願いいたしております。

会員として参加いただく場合、下記申込票を所属寺へ提出していただき、会員として登録し行事の都度ご連絡させていただく事となっております。第30組に関わる全ての方々のご賛同を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

-----きりとり線-----

讃頌会入会申込票

2010年 月 日

氏名		電話	
住所	〒	所属寺院	

## 真宗宗歌

ふかきみ<sup>のり</sup>法にあいまつる  
身の幸<sup>さち</sup>な<sup>に</sup>にたとうべき  
ひたすら道をききひらき  
まことのみ旨<sup>むね</sup>ただか

## 恩徳讃

如来大悲の 恩徳は  
身を粉にしても 報ずべし  
師主知識の 恩徳も  
骨をくだきても 謝すべし

## スタッフ紹介

川合幸宏、成瀬元、篠田茂、南谷広機、太田成誓、山口眞一、佐々木一実、橋本寛、青木琢也、荒山淳、荒山信、小笠原哲、加藤義彦、島津通、長岡明潤、仲尾覚、中島秀幸、長谷川顕、長谷川誠、前田健雄、前田和丸、八神功信、山田良弘、金森太郎、森川英治、島一雄、風岡良子、川合鈴子

(舞人) 荒山淳

(楽人) 羽塚尚明、梶村保成、横田孝憲、遠藤恭範、長谷川専勝、中島秀幸、長谷川誠、青木琢也、佐合亮